

モモの葉でモモ胴枯細菌病を捉える！ 植付け前に病原菌の存在を知る技術



モモ胴枯細菌病による被害

左：急性枯死症状

右：樹液の漏出痕



モモ胴枯細菌病菌の捕捉方法

左：植付け予定地の土壤にモモの葉を
挿入しているところ

右：病原菌が捕捉された葉

開発のねらい

モモ胴枯細菌病は、モモの若木に急性的な枯死症状をもたらす病害です。病原菌は土壌などモモの周辺環境に存在し、苗木植付け時から感染する恐れがあるにも関わらず、植付け前に病原菌の存在を知る簡易な技術がありませんでした。そこで、簡易に入手可能なモモの葉を用いて、本病の感染リスクを事前に推定できる技術を開発しました。

新技術の概要

- モモ植付け予定地から採取した土壌にモモの葉を挿入することで、土壌から病原菌を捕捉できることがわかりました。
- 捕捉した病原菌は、遺伝子診断法（LAMP法又はPCR法）又は市販のイムノクロマトキット（モモ胴枯細菌病検査キット、小池化学（株））を用い、モモの葉の腐敗部を検定することで検出可能となります。

活用場面

本技術は岡山県内のモモ栽培園地又は栽培予定地に適用でき、事前に本病の感染リスクを知ることで、排水対策など植付け前の対策に結びつけることができます。なお、降雨が少なく乾燥した圃場の土壌では、検出精度が低下するため、検定用土壌の採取は、まとまった降雨がみられる時期に行い、水が溜まりやすい場所から採取する必要があります。